



斜面の土地に階段状の田畠が至る處にある

の國ジャワに、これはまたどうした譯だらうか。これにはいろいろ譯があるが、人間が、多すぎるのである。これが第一の原因だ。

考へて見て下さい。ジャワの人口密度は、世界第一で一平方キロにつき、驚く勿れ三百五十人、日本の百五十人に比較して、二倍を遙かに突破する稠密さである。

これを證據立てるかの如く、バタビヤの街を歩いて、一番目につくのは赤ん坊を抱へた母親の数がおびただしいことである。女といふ女が、皆な赤ん坊を抱へてゐるとしか思へない。背に坊やおんぶし、腕に一人を抱いて、まだ歩きかけの子供の手を引いてゐるのも、數々見受けられる。手ぶらな女は殆んどゐないのだ。バツサル・スネン（バタビヤの市場街）の午前の出盛り時は、宛ら赤ん坊、女、赤ん坊の洪水のやうである。この風景を見て、おお素晴らしい原住民の繁殖力よと驚かぬものはなからう。

なるほど赤ん坊の多いのも無理はない。ジャワの人口は十九世紀の初めごろは、



僅か四百萬人だった。それが一八八〇年ごろの調査では、驚く勿れ二千萬人に飛躍し、一九三〇年の國勢調査によると、四千三百萬人に殖えてゐるのだ。換言すると僅か五十年間に、二倍以上も殖えたことになるのである。一九三〇年以後も、また一年間に全人口の一〇パーセントづつ殖えてゐるのが實情である。全く母國日本の生めよ殖せよのお先棒をかついで威勢のよいのがジャワといふことになるだらう。

これには、いろいろ理由もあらうが、最も大きなものは、なんといつても和蘭政府が残してくれた遺産、衛生施設だ。このお蔭で衛生のよろしい上に、氣候が極めて良いのと、家族制度が相俟つて、増殖一路を辿つてゐると見て差支へあるまい。

だが、殖える殖えるだけでははじまらない。殖える一方の、これら原住民に大東亞戰の眞意を理解させて、その人的資源を生かせるだけ生かすのが、今日の問題である。





## 新しき「夢の島」

— 雑草一本もなし兵隊さんの通る道 —

バリ島はもう嘗てのバリ島ではない。光と熱に恵まれた裸生活も、この頃では娘の大部分が恥しげに胸を被ふやうになつてゐるし、そして住民の凡てがこれまでの無氣力の生活を擲つて、新しい時代の正しい線に副ふべく、ひたむきな努力をつづけてゐる。

『夢の島』とか『獵奇の國』とかいふ煽情的なスローガンで、ヤンキーの観光客を招かうとした嘗ての和蘭K・P・M汽船會社の宣傳文句は兎も角、回教の勢力に追はれたヒンヅー教徒が、その避難地として選んだ東インド隨一のヒンヅー教國であ

るだけに、教義と傳説から生れた怪奇な彫刻が、依然として島の至る所に見られるが、その下を往き來する女の大部分は、簡単な布で胸を蔽つたり、ターバン見たいな鉢巻の端を垂らして、兩の乳房を隠してゐる。ヤンキー達にすれば、これは大變な失望の種には違ひなからうが、かうした變化をもたらししたのは、昭和の初め頃から、どしどしこの方面へ進出したメイド・イン・ニッポンの安い木綿類のお蔭であつたのだ。何しろ二、三十錢も出せば、胸を被ふ丈夫な布が容易に手に入るやうになつたといふのだから、その頃から上衣とはいかないまでも、布を引つかけることが流行し出して、今までは野良仕事以外に、かうした風習が女達の間にも出来たのだ。

『半裸のバリ』から、かくて『上衣を着たバリ』へだんだん移つてゐるのだが、日本製品による外觀上のこの變化よりも、更に三月十九日の皇軍上陸以來島民の示しつつある大きな精神的變化こそ見逃すわけにはいかない。



われわれの進み行く至る所で、自轉車に乗つたものは車から降り、野良仕事をし  
てゐるものは鋤とる手を休めて丁寧なお辭儀をして歡送迎してくれる。部落に來る  
と、どの軒にも規格に適つた綺麗な日の丸が掲げられてゐる。兵隊さんの通る道な  
ら、部落民の勞力奉仕によつて、雜草がとり拂はれ、十二分の地均しをして一寸し  
た間道へ入つても、とても氣持がよい。男の働さがない所といはれてゐたこの島で  
はあつたが、今日の前で汗水たらしてゐるのは、總て村の若衆達なのだ。

歡迎といへば、去る日、〇〇部隊長が、この島を初巡視した際のバングリ州知事  
の熱誠ぶりは大變なものだつた。この島は八州に分れてゐて、舊和蘭統治時代の州  
の王様がそのまま州知事として存續することを認められてゐるのだが、その中で貧  
乏州といはれたこのバングリ州知事が、部隊長の近づくのを知るや、キンタマニま  
でサトバロン音樂の一團を送り賑やかな奏樂のうちに迎へたとのことである。

われわれも一夜、カロンリムーロ州知事の家に厄介になつたが、嘗ての王様は見

知らぬわれわれながら、下へもおかぬもてなしをしてくれた。和蘭統治時代、豚の  
屠殺税として自家消費の家にも、一圓づつ納税を強いられてゐたが、わが軍當局の  
温い思ひ遣りから、一圓のものを七十五錢に切り下げることが認められようとして  
ゐるのに、大東亞戰爭完遂のために、われわれにもその負擔をさせてくれと元通り  
一圓の税額を收めようとするものが續出してゐる有様だ。

壓政に苦しみ痛めつけられてゐた島民達の氣持が、和蘭を憎み、またそれだけ日  
本に期待して、今生き生きと働さ出したわけである。全島八十餘の日語學校が非常  
な盛況を呼んで、どの學童も、もう片假名をすつかり學び覺えてしまつたのであ  
る。



## 栗色の舞姫

——バリー一番の踊り娘——

大日本の新しい名所となつた地上樂園バリー島は南の豊かな光と熱の中で新しい息吹に蘇つてゐるが、中でも島の誇りバリー踊りは島内のあの町、この村で兵隊さんのために踊り続けられ、共榮の踊りと歌聲は南の島を彩つてゐる、踊りは島の老幼男女の生活の中に生きてゐるが、バリー一番の踊り娘はチャワン、シャーリーといふ二人の娘さんだ。いづれもデンバサルの街に住んで晝は野良仕事に精出してゐる、つぶらな瞳の百姓娘であるが、その名聲は海を渡り世界的に知られてをり、チャワン嬢はわが伊東タイコの先生である。



椰子の木の下に踊る栗色の踊り娘



では絢爛たるバリ踊りはどんな支度で踊られるか、チャワン、シャーリー兩嬢の踊り支度の出来るまでを紹介しよう。

炎天の下に野良仕事を終へて歸つた『栗色の舞姫』は、さて今夜の踊り支度、家の前の椰子の木蔭を化粧部屋にして嬉しい粧ひをはじめなのだ。

彼女が野良仕事の時に畑の畔から折つて來た赤く美しい花を漆黒の髪にさし、栗色の裸身に赤い帯を締め、二つの耳に大きい象牙の輪をはめ、金銀をちりばめたサロンと胸高く乳をかくした胴卷のやうな衣裳をつけ、金色の腕輪をつけて支度は出來る、かうして半時間ほどで椰子の木蔭に『輝く舞姫』は天から降つたやうに生れるのである。





## カチン族

—英軍と最後まで戦つた誇り—

ビルマは人種市場である。多種多様な民族が、各々の歴史的な地域に生活してをり、この民族問題を度外視して、眞のビルマを論ずることは不可能であるとさへいはれてゐる。

ビルマの総人口は、大約千五百万人と稱せられ、英語では大ざつばに「バーミーズ」と呼ばれてゐるが、この中には、北ビルマ、雲南國境近くに居住するシャン、カチン族及び西北インド國境に生活するカレンチン族等も含まれてゐる。そしてこれら八十餘族は、單に「バーマン」と一括せられて純粹のビルマ人種とは區別されてゐる。

てゐる。

現在直接皇軍と接觸し協力して、ビルマの再建に努力してゐるのは、これらの中のシャン族、カチン族であるが、北部ビルマの國境、ミートキーナから西北五マイルのカチン部落モンキン村を訪ねて、初めて見る皇軍への感想及び同族の奇妙な風俗信仰等について、直接カチン族から聽くことを得た風聞記をお贈りしよう。

モンキン部落は、イラワジ河畔に沿うた、戸數百二十餘の平原の村であるが、ここにはカチンのみが昔ながらの生活を送つてゐる。全部が農業を仕事とし、毎朝ミートキーナの街に野菜賣りに出掛ける以外は他種族とは交渉を欲しないといふ生活である。

カチン族は大約三十五萬餘と稱せられてゐるが、何れも北方の山地に住んでゐるので、その數は確かではない。バーモからミートキーナに沿うた、山地地帯に僅か



ばかりの、農作を續けては、純朴原始の生活を送つてをり、英國統治時代には、カレン族の兵士と同様軍隊の使役に用ひられたが、それは單に軍の雜用に驅使されてゐたといふ、悲しい境遇であつた。然しその犍猛勇敢な性質は人に服従することを欲せず、英國の最後までの痛として相當手古すらせた輝かしい歴史を最近にも持つてゐるのである。

一八八五年ビルマを攻略した英國軍は、少佐クックを總帥としてカチン征伐の軍を、モガング（ミートキーナ東南方二十マイル）に向つて起した。悪路を衝く陸上部隊と、水路を利用して北上する部隊は旬日にしてモガングに追つたが、そこに待機してゐたのは、マラリヤと虎、豹を利用するカチンの精銳達であつた。

彼等は使ひ慣れた猛獸を驅使しては、傳來の毒矢を樹蔭から射るのであつた。それには全く英國軍も困惑し切つて、第一回の討伐は見事に失敗したのであつた。

それから四年間一八八九年に至るまで、英國軍は指揮官を代へては、この討伐を

繰り返してゐる。これは僅か五十年前の話である。

カチン人はその後英國の奴隸として哀しい生活を送つてはゐたが、しかし彼らの唯一の誇りは、

『ビルマで最後まで英軍と戦つたのは我々である。』

といふ民族の戦闘意識であつた。通常五尺を僅かしか出ないといはれる、カチン人のこの誇りは皇軍への協力に燃え沸つてゐるのである。

モンキン部落に入つて行くと、初めて見る長い髪の日本人であると、家々から黒い顔がのぞいてゐる。

容貌に一見變つたところは見えませんが服装は殆どが黒色といつた質素なものである。老人も若い娘もみんな、この服装なので、衣服で年齢の判別は不可能である。それに上衣には、金銀による圓形のカツゴウといふ飾りを縫ひつけてゐるが、これがカチンの唯一の裝飾であり、このために全財産を傾けてゐるのである。



ビルマ人が、バゴダにその財寶を捧げるやうに、カチン人は自らの裝飾にそれを捧げてゐる。頭上には黒頭巾をかぶり、街に出る時は男は今でも、傳來の山刀を腰にし、女は頭を利用して、シンノエと稱する買物籠を吊してゐる。

カチン部落にはデユワと呼ばれる、統領を有するものと、支配者としてない共有部落の二つの種類がある。マキン部落の村長カムはまだ四十一歳といふ働き盛りであるが、甲狀線がはれて、一見六十歳位に見える。然し、さすがに元氣旺盛『日本の兵隊さんとカチン人とは友達だ』と冒頭しながら次のやうに語つた。

『日本軍がミートキーナに来るといつても、私達だけは決してあわてなかつたし避難もしなかつた。長い間英國人に苦しめられてゐたし、丈の低い日本人の強いことも知つてゐた。そして避難民が連日南から逃げて來るのが可笑しくてならなかつた。』

部落では日本軍が來れば出來るだけ援助をしようと、四月の末相談して、實際

その通りやつた。これは日本の兵隊さんがよく知つてゐるから聞いて見るがいい我々はカチンと呼ばれてゐるが、私達だけではカキユ、またはチンパウといつてゐる。それは「大河の主」と「河の源」といふ意味である。

カチンには古い傳統とか習慣があるが、それは他人には奇妙に見えても、私達には何の不便も不思議もない。名前も長男はカム、次男はウング、それから下へ順々にラ、ツ、ヤウ、カ、キャングときまつてをり、女はカウ、ル、ロイ、ツウカイ等十二女まで定められてゐるが、これなど大變便利だ。お産した場合に、生れた子を他人の妻の乳で一ヶ月間育てることも、母が床についてゐる時だから、何も無理とはいへないだらう。ただ結婚する相手が生れた時から定められてゐるのは若者達に氣の毒だから何とかしたいと思つてゐる。何しろわれわれの同類の日本人が來たのだ。喜んでビルマの復興に協力する。英國兵に對しては一步も退かなかつたカチン族だ。どんな働きをするか見てゐてくれ。』



## バダウン族

— 眞鍮の首輪をはめて —

ビルマもシャン高原の南端、カレン地方に接するモンバイ土侯領内の山地深くにあるバレン部落を中心に、山地種族のバダウン族が住んでゐる。

バダウン族は蒙古系の人種で、現在僅かに一萬、言語もビルマ語とも、シャン語ともつかぬ彼等独自の言葉を使つてゐる。

山地種族チン族、カチン族などに比べて、すつと数は少いが、無力なバダウン族を有名ならしめてゐるのは、やはりバダウンの女たちの酋長の慣習である。

バダウン族の部落バレンは、シャンの首都タウンジーから、シャン高原を百二十

餘マイル南下するとカレン地方の首都イコウに着く。そこから二十五マイルばかり行くと、山をめぐつて點々と人家の散在する部落がバダウン族の本據、バレンの部落である。

恰度、バダウンの女たちは、山腹に植付けた稻の刈入れをやつてゐた。日本の簡單服に似た黒い手織木綿の粗布を身にまとひ、首にびかびか光る眞鍮の輪をぐるぐると巻き、両手<sup>と</sup>と足首にも銀色の輪をつけてゐる。想像してゐたやうな犖猛な感じは餘りない。鎌を使ふのを見てゐると、首が曲げられぬため、眞直く前方を見ながら、大體の勘で稻を刈つてゐる。

バダウン族の女たちは、通常六歳位から首輪を巻きはじめた。首輪は一輪、二輪と別の首輪を巻くのでなく、長い一本の眞鍮をぐるぐると胸の上あたりから顎の下まで巻くのである。だからもともと長い首が非常に長く見える。以來年を重ねるにつれ、より長い眞鍮の輪と交換し、次第に首が長くなるが、この首輪をはずすのは



巫女が専ら扱ふことになつてをり、たとひ両親でも夫でも許されない。また彼等が如何に外さうとしても外れないさうである。

朝起きると錆びないやうに、真鍮の輪を磨くことが彼女らの日課であり、また何よりのお化粧でもある。汗除けのために、女たちは首輪の間に黒木綿の布を入れてゐる。首が長ければ長いほど美人だといはれるが、長いのは約二尺、真鍮の輪を十五、六も巻いてゐる。輪は真空でなく、普通一貫八百匁の重さである。死んでも女はこの首輪のまま埋葬される。

この首輪の由来はこんな風に傳へられてゐる。昔、バダウン族は女性中心で男性は悉く女性に屈伏してゐた。當時支那から部落に金の延棒が届けられた。女たちは胸にあてたり、肩にかけたりして、これを如何に飾り物として利用するか、いろいろ考へたが、男性側は計略をめぐらし、女の首に巻きつけさせ、綺麗になつた、綺麗になつたとほめそやしたものだ。『黄金の首枷』で女をしばりつけようといふ男性

の罠に陥つたとも知らず、ほめそやされた嬉しさに、女性たちは負けず劣らずこの流行を追つた。遂に男性の思ふ壺にはまると共に、以後バダウン族の女の習慣となつたといふのである。首輪をはずすと女の首はつかひ棒がなくなり、ばつたり倒れてしまふさうである。

しかし、いま見る村は、實に平和で男女協力して働いてゐる。小さいカトリック教會があり、イタリヤ人の神父が傳道に當つてゐる。この結果、従來の精靈崇拜を捨て、一部のものはキリスト教を信仰してゐるといふことである。



## ワ ー 族

—木の枝に住む超人類—

雲南國境のカチン族を紹介した序でに、ビルマ・ルートを一步雲南に足を踏み入れてワー族の風習を探つて見よう。

山々は急に相貌を變へ、峰は高く、谷は深く、峻嶮な地形はこの雲南を貝のやうに外界から守つてゐる。標高五千尺内外、内地でいへば箱根のやうな山々が獨立して、それぞれ深い谷を距てて向ひ合つてゐる。だから精強なわが兵隊さんの苦勞も並大抵ではなかつた。どんな強行軍をやつても二つの山を越すのに一日はかかる。樹木が少い上に、四十五度に近い急斜面、おまけに物凄い土砂崩れを名物としてを

り、とめどもなく砂利岩石の流れを降らすのである。しかも篠つく雨の雲南であるここを抜いて敵地深く分け入つた皇軍の辛苦に先づわれわれは深く感謝しなければならぬ。

この峻路を衝いて雲南に入ると、家の造り方は一樣に瓦と白壁で、全く支那式になるが住民は決して支那人ばかりではない。シャン人、カチン族がサルウイン河の上流たる怒江の對岸まで進出してゐる。

クローン近くの東部山中に入ると、今なほ首狩りの風習を持つワー族といふ蠻人さへゐるのである。このワー族は零下四十五度にも降る山中で、一年中着物なしの素つ裸であるといふ超人的人類で、夏は木の枝、冬は斷崖の中腹の穴の中に住んで狩獵を事としてゐるのだ。

異人種を見ると、毒矢で射り、忽ち首をちよん切るのをお祭りといふ心得る極めて悪い癖があつて、お嫁さんを貰ふには、男はどうしてもこの異人種の首を花嫁に贈り



物としなければならぬ、まことに困つた連中である。

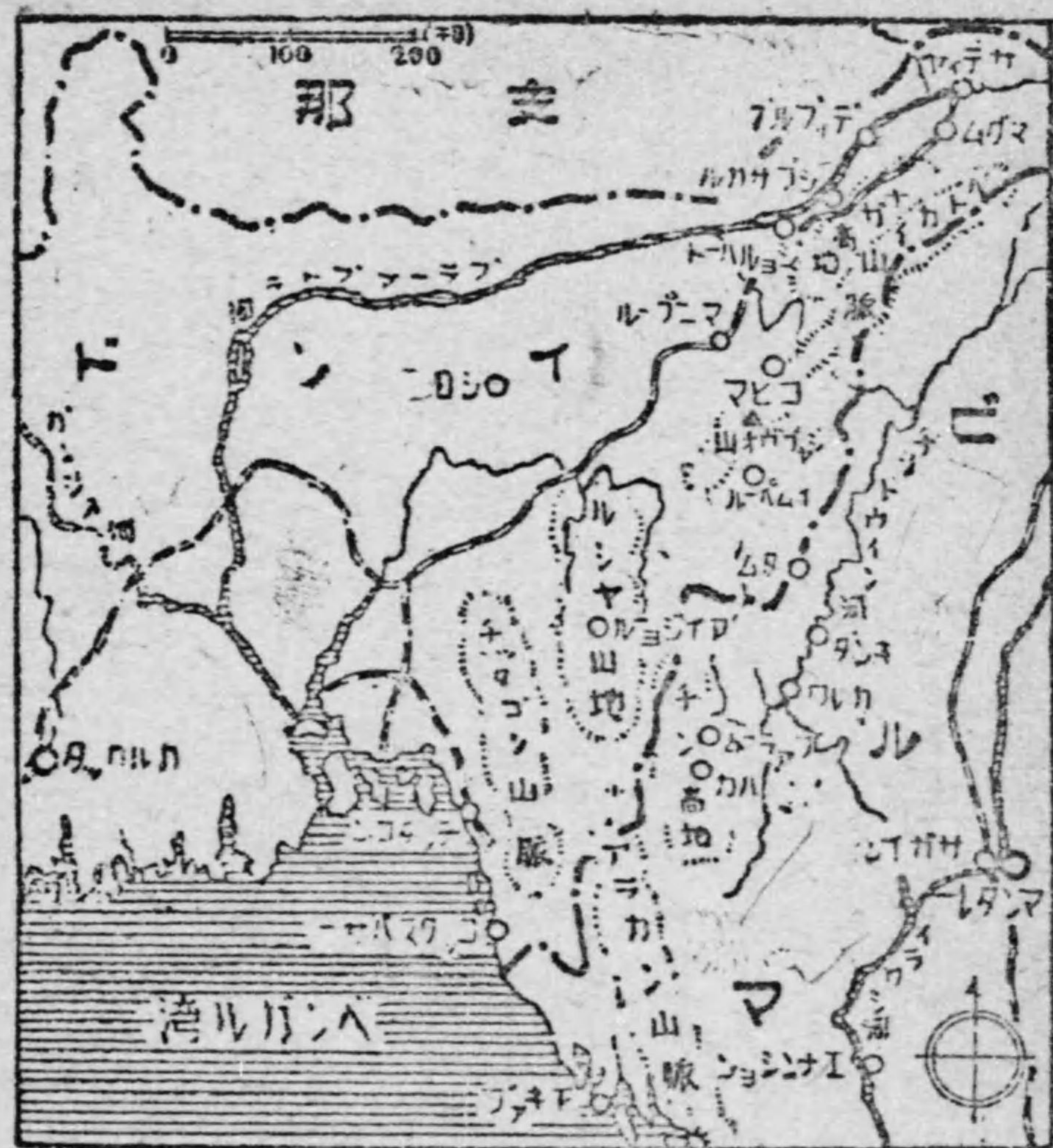
ところが、愉快なことにはこのワラ族も皇軍と支那軍の區別を何時の間にかやら辨へて、クローンの土侯を通じて日本に恭順する旨申込んで来た。そしてわれわれの進むところに、是非とも兵隊さんを送つてくれと熱心な嘆願をして、勇士たちを面喰らはしてゐる。

## ナガ族

— インド國境に吹矢の種族 —

ビルマからインドへ——印緬國境を一たび越えれば、アッサム、ベンガルの兩州がある。北は西康に接する一角から南はベンガル灣まで、印緬國境は密林と猛獸の咆哮する五千フィートから三千フィートの峻嶮な山脈の連続で、印緬を分離させる自然の障壁となつてゐる。パトカイ山脈が北から南西に走り、アラカン山脈が國境からビルマ領内を南に深く喰ひ込んでゐる。このインド内の國境高地一帯には約百萬の山地種族が蟠居してゐる。ラングーン、ジョーゴン街に住む山地種族のナガ族出身カルカッタ大學に學んだインテリ、フイゾー(三六)、ケビアリー(三〇)、兄弟から





現代のインド・ビルマ方面の地図

この印緬國境の山地種族を語つて貰はらアッサムの高地には四つの山地種族が住んでゐる。ナガ山地にナガ族が約三十萬、ルシヤ山地にルシヤ族が約二十萬、ガロ山地にガロ族が二十萬、カシ山地にカシ族が三十萬と約百萬の山地種族が古

くから彼等の素朴な生活を營んでゐる。

ベンガルのチッタゴン山地には、また別の種族がをり、インド全體を通ずると、かかる未開種族の數は二千五百萬の多きに達し、しかも彼等は、各々言語や宗教を異にしてゐる。

ナガ族その他印緬國境の山地種族は蒙古族の血を享けてをり、皮膚から髪の色まで日本人そつくりで、非常に日本への尊敬と親しきをもつてゐる。宗教はナット(精靈)を信するほか、英人の教化でキリスト教も一部に行はれてゐる。性質は大膽で尙武の氣風に富み、吹矢が極めて得意だ。

英人は一八七九年にナガに侵入し、ラジャ(土侯)を倒し、主權者となつた。しかし一部のナガ族はなほ獨立を守つてゐたが、一九三九年十二月二十四日、遂に『自由ラガ』は失はれたのである。

アッサムは寶庫インドのそのまた寶庫である。サダイヤ附近のディッポイ油田は



ビルマのエナンジョンに次ぐ油田であり、またマダム附近には豊富な石炭が出る。その他アッサムには馬鈴薯、オレンヂ、茶、棉を産し、いづれもインドを戦争資源の供給源とたのむ英國の致命的なものだ。これがため英國は年來アッサムの防備を嚴にし、ビルマ敗退後は著しく軍隊を増強し國境の防備を嚴にしてゐると傳へられてゐる。

しかしナガ族はじめこれ等の山地種族は、熾烈な反英感情を燃やしてゐるといはれるから、いつ誰が『密林の叛亂』が起らぬとは豫想し得よう。

## アチエ族

——血に彩つた『義人の橋』——

北スマトラ、アチエ州には勇猛精悍をもつて鳴るアチエ人が住んでゐる。この慍悍な住民は、とりわけ皇軍によく協力し、前線の話題となつてゐる。いまここに紹介する血に彩つた『義人の橋』は、よくこの住民の性格を現はすものといへよう。

アチエ州の首都コタラヂヤ市から東南三十キロのアチエ河に架かるケルミ橋を附近の住民は『義人の橋』と呼んでゐる。これには死をもつて守り通した三人のアチエ青年の悲壯な物語があるのだ。去る三月中旬、皇軍が北スマトラへ上陸を敢行したとの噂がアチエ州にも電光の如く傳はつた時、メダンとコタラヂヤを結ぶ幹線



道路の最も重要なケルミ橋を控へたセレモン部落の青年達は、

『オランダ軍は必ずこの橋を破壊しようとするだらう。われわれはアチエ人の面目にかけても、この橋を日本軍が来るまで護り通さねばならぬ。』

と、直ちに警備隊を編成、日夜この橋を護つてゐた。

案の條、間もなくオランダの産業破壊隊がこの部落にも現はれ、銃剣をもつて部落民を威嚇しつつ橋の破壊を命じた。しかしこんなことを承知するアチエ青年ではなかつた。待つてゐましたとばかり、ここに暴戾なオランダ軍と部落民の間に橋を挟んで猛烈な戦闘が開始されたが、悲しいかな、部落民には精巧な武器がなかつた。さすが剛勇を以て鳴る部落民も力盡き矢折れて數刻の後には、橋を放棄せねばならぬ状態となつた。この時である。

『天命に背くオランダ軍め、この橋を壊したくば俺達を殺してからやれ、俺達は死んでも魂は何時までもこの橋を護るぞ！』

と、絶叫しつつ躍り出て橋の真ん中へ仁王立ちとなつた三人の壯漢があつた。マイ、ブラヒム、ハサンといふ三人の青年で、叫び終るとはつたと敵をにらみながら全身蜂の巣となつて倒れた。鮮血は橋を彩つた。この鬼神も哭く壯烈な三青年の最期の姿を見ては、流石のオランダ軍も胸を打たれたものか口々に何事かつぶやきながら何處ともなく退散してしまつた。

遂に橋は三青年の血によつて、魂によつて破壊から救はれたのであつた。この橋は石造、長さ約四十メートル、幅七メートルの立派なもので、すつかり平和を取り戻した今、誰いふとなく『義人の橋』と稱して行人は三人の魂に默禱を捧げて行くのだ。



## ガヨ族

— 滅び行く者の怠惰な生活 —

ガヨ族の本場、ガヨ山脈のタケゴンに自動車を走らせ、彼等の生活環境に觸れ、その本質を探つて見た。ガヨ族はスマトラの反逆兒アチエの純粹種だが、次第に雜種のアチエ人に追はれ、スマトラ中央山脈のタケゴン附近に立籠つてゐるのである。人口約五萬二千、半未開の滅び行く民族で、アチエの激情も勇敢さもないが、生活様式はそつくり同じである。

タケゴン附近は海拔五千尺、タワル湖を控へ風光明媚のところ、氣候はまるで日本の秋のやうである。農産物の適地で、米、野菜類が豊富で歐洲人經營の松樹園、

コーヒー園、紅茶園も大規模に進出してゐる。この恵まれた土地に住みながら、ガヨ族の生活は、全くみじめなもので、大部分乞食小屋のやうな住居だ。大家族主義で、一部落が全部親類で一軒の家に何家族も住んでゐる。家の形式はアチエと同じ三段しきりで、中央が一段高く寢室となり、兩隅の一段低いところが、家族の住居と臺所になつてゐる。

晝間は焼けるほど暑いが、朝夕が冬のやうに寒いので厨房用のほかに、煖房用のお粗末な設備がある。食器と少々の衣類とす暗い採光、まことにうら寒い生活風景だ。聞くところによると、シャツ等の下着類を着るやうになつたのは最近のことだ。ただ腰に巻くサロンを首からすつぽり被つて暖を保つてゐたさうである。今では晝間は腰に、朝夕の寒い時はマントのやうに着て歩いてゐる、スマトラでは珍らしい風景である。

こんな住居で早熟の子供をかかへて、夫婦生活に差支へるためか、子供が九歳に



なると男女ともに獨身舎に入れられる。男の獨身者をサランビー、女をサンビー・ブールーといひ、結婚するまで親の許を離れて生活する。男は音楽や男一式のこと、女は敷物の編み方や女一式のことをここで習ふが、晝間はみんな野山で働いてゐる。

同じ部落の獨身者同士の戀愛は御法度で、もし犯せば仲間から制裁を受け、毆られるばかりか會長に牛や米、鶏等を献上した上、部落民一同に宴會を開いてお詫びすることになつてゐる。『それではガヨ族は戀愛が出来ないのか。』とガヨ族青年に尋ねると、青年はにこしながら『なあに、野山に働いてゐる時、隣部落のものと知合ひになれますよ』と答へるのだつた。この獨身舎には圍爐裡があるだけで、調度品はなし、着物は少しもないあばら家、火を圍んで雑談に耽ける夜の佗しさが思はれて胸を痛められるが、彼等にとつてはこれでも樂園であるのだらう。

丁度稻作が終つたところだつたので、所々に豊年祝ひの太鼓と鐘の音が聞かれた。シャンボンシャンボンと終夜打ちならす頗る單調なものである。それからガヨ踊り

を見せて貰つた。簡単な太鼓と鉦の囃し、或ひは手拍子で操り人形式に首を振り、手を動かして一人から二人とだんだん踊り手が増えて行く。勇壯に胸を手で打つ柔道のやうな踊りもある。どれも單純なのだが、うんざりする程一つの場面を見せられた。踊りは踊りの隊長があつて始終指揮してゐる。

賭博は非常に好きだが、舊和蘭政府に禁ぜられたため、その影は殆んど絶つたといふが、それでも結婚式の日などは、大した盛況だといふ、野原に莫莖を布いて上に石を置き、これに銅貨二枚を投げつけて勝負を決めるのださうである。それに飯より好物なものに鬪鶏がある。相憎と見られなかつたが、相當血を沸かすらしい。

住民の小學校があるが、無智文盲の者が多く、手癖の悪いことは無類である。うっかりすると盗まれてしまふ。皇軍の進駐に當つても、和蘭人の家屋から手當り次第に掠奪し、硝子さへはづして行つてしまつた。書物を持出したが、これは讀むのではなく紙を破つて品物を包むのに使つてゐたさうで、警備の皇軍が驚いてこれを



制止したといふ話もあるのである。

タワル湖の西海岸に抜けてゐるといふ、素晴らしく大きい鐘乳洞がある。五十年前、和蘭兵が侵入して來たとき、ガヨ族はその中に逃げ込んで穴居したといふ。今は牧畜の納屋に使つて糞にまみれてゐたが、鐘乳洞の陽除け小屋は正に天下一品だらう。彼は金のあるうちは決して働かぬ。松樹園、コーヒー園、紅茶園と、職場は澤山があるが、勞働力はみなジャワからの移民によつてゐる。これはガヨ族が、金のあるうちは次の働きに出ないためなのである。最低の生活をしながらこの態である。アチエの勤勉にして貧しいのとは大變な相違がある。結局アチエの本家ガヨ族は滅び行くものの運命を自ら辿つてゐるのだ。アチエ人が『ガヨ族は蕃族だよ』と相手にしてゐないのも理りであらう。

## ミナンカバオ族

—南方切つての優秀民族—

南方切つての優秀民族ミナンカバオ族は、スマトラ西海岸州に、がっちり根を張り、華僑勢力の浸潤してゐる南方にあつて、同地方だけは完全に彼ら原住民が、華僑をノック・アウトして經濟實力を握つてゐる。初等教育の進歩はスマトラ隨一とされてをり、將來シアク河を遡航し上流より鐵路によつて東西兩海岸州を結ぶ中部スマトラ横斷交通計畫が完成すれば、ミナンカバオ族の活動は當然飛躍するものとして、大きな期待がかけられてゐる。最近相次いでスマトラ視察をやつた永田南方増水マレー、スマトラ兩軍政顧問が、口を極めて、この民族の優秀性を讃へてゐる



のでも活動的なミナンカバオ族の凡てを肯けよう。過般、同州フォルト・デ・コック警備の兵隊さんが、現地を踏査したところ、バトサレカル附近の小村バカルヨンの土侯の家で傳説に名高いサアンサイトオと稱するミナンカバオ王國々寶の一つが、今はほ鄭重に保存されてゐる事實を確認、サアンサイトオに記された古文書によつて、同族とわが國との特殊な關係が明らかにされ興味津々たる話題を呼んでゐる。

ミナンカバオ族の起源は太古の傳説によれば、四人の兄弟によつて開祖され、この四兄弟が君臨したフォルト・デ・コック東南百五十キロのマラビ火山は、今もスマトラの高天原として聖峰視されてゐるほどだ。西暦六百年前に書かれた『トンボ』といふ書によれば、日本のジエン王(JENWO)の御代に日本皇室よりミナンカバオ王に王の印として贈られたのが、即ちサアンサイトオで、今回の調査によつて同王と恐らく、わが皇室との歴史的會見が行はれたといふ風に記され、從來王の即位式、結婚式、葬儀などには、必ず用ひられたものである。

## バゴボ族

— 腕輪を自慢のお洒落族 —

フィリッピンでお洒落族の噂の高いバゴボ族を紹介しよう。背は低く、色は黒く團子つ鼻に厚い唇……日本では、正に醜男みにこの見本だが、彼等の間では申分なき美男子なのである。

ミンダナオ島ダヴァオ州のアボ山に、近代文化から取残され、原始生活を營む彼等だが、その神話は大和民族が彼等と同祖であることを教へ、固くこれを信じてゐる。バゴボ族の神話は、天地創造のはじめ、アボ山の東、シプラン河の上流にサツダン・シバの男女があつた。禁斷の果實を食べて七男一女を生んだが、六男のサグラ



ポンは、勇氣に富み、しかも聰明、成長して父母の許しを得て、海路遠く北へ旅立つた。その子孫が彼等のいふタカマボンジ(大和民族)だといふのである。七男アラガンは、似ても似つかぬ子で色が白く、だんだん父母に疎んぜられて米國へ去つたといふ。日本人を同じ先祖の子だといふ考へから、邦人に對する感情も非常によい。バゴボの人々は調査のいたしやうもないので、はつきりしないが、アボ山を中心に一萬人位といふことだ。男女とも服装に凝り、籐の首飾り、貝の腕輪を自慢にし男まで眉を細くそつて、成年すると齒を黒く染める。髪を伸ばして玉や房で飾り、下衣を着て、小玉で刺繡した上衣を重ね、刀を帯びてゐる。一本刀を腰に、大胡坐をかいた女の様は姐御といった形だ。

アゴン(銅羅)と太鼓を打鳴らし、ニッバー・ハウスの蔭で笑ひさんざめくことに幸福を感じてゐる。裁判がまた愉快で、原告と被告双方とも、頭を水の中に押し込んで息の長い方が勝つことになつてゐる。





## 凧釣り足釣り

——エンヂン代りに凧船浮べ——

ジャワの釣りは人も魚も内地からみれば恐しく間伸びしてゐる。釣りの仕掛も大まかで、技術も幼稚である。

バタビヤの海岸では舊バタビヤ港のバッサール・イカンの突堤が竿釣りで賑はつてゐるが、遠淺の海中へ約五十メートルの間隔を保つて延びた二つの突堤には、朝から晩まで原住民や支那人の太公望連が一間おきにすらりと並んで糸を垂れてゐてそれが揃ひも揃つて子供が兵隊ごつこに使ふやうな、お粗末な竿をつき出してゐるのである。竿の長さは一間半乃至二間といつたところ、繼ぎ竿など薬にしたくも見

られない。

釣り糸も針も途方もなく大ざつばで、内地の釣りではハリスに使ふテグスはここでは全く見當らない。五厘から六厘の人造テグスに七、八分から一寸といふ大きな鉤を不細工にしばりつけ、その釣糸も鉤も手製以外に殆んど日本製で、釣り師たちは一様に『ニッポン・バグース』と拇指をつき立てて褒めてゐる。

餌は内地と同じく小さな川鰕、烏賊の切身、むき鰕などが用ひられる。こんな大ざつばな仕掛でも南の魚はやはり南なりに大まかに出来てゐると見えて盛んにかかると釣れる魚は、黒鯛をはじめ各種の鯛（べん鯛、もん鯛、むろ鯛等々）めばる、小鰈、はぜ、さより、大物では平目、鱈などである。

ジャワでは舊蘭印時代から淡水魚養殖には相当力を入れてゐたので、河の釣もかなり盛んであつた。餌はやはりみみずで、釣れるのは鯰そつくりのスミラン、支那料理で珍重される、いはゆる草を食ふグラメ、内地で朝鮮鯰などと呼んでゐる魚に



よく似たガブス、それから鰻、鮒、鯉といったところ。

さて最後にジャワ海の王者沖繩縣人の最も得意とするのは曳船のエンジンをかけ放しにしてその船尾に五、六人の漁師が一人三本くらゐづつの繩をのばしての擬餌角釣りである。この擬餌角には鯉、鮒、鱈などが来る。

また原住民たちの間にはバンチン・ラヤンガン（凧釣）と呼ぶ漁法がある。これは一隻の漁船に二人ぐらゐ乗りこんで海風のままにエンジンの代りに凧をあげて船を走らせ、その凧に釣り糸をつけて鯉や太刀魚、鱈を釣るのである。折よくバタビヤ沖の小島の近くで、この釣りを見たが、三十分ほどに二尾の太刀魚があがつた。漁師が手繰り寄せると凧はきりきりと舞ひながら海中にも落ちずに船に歸りその先にきらりと白い太刀魚が光る。

南の國ジャワの釣はこゝらあたりに止めを刺すのではあるまいか。

海路ラングーンを訪れる人は、船がラングーン河を遡りはじめると、小船の上に

得體の知れない恰好をして寝をべつてゐる連中を見て『あれは何か』と必ず疑ひを起さずにはゐられない。これがラングーン河の漁夫なのである。

小船はせいぜい一人の男が横になれる程の大きさで、寝をべつてゐると見たは實は釣りの眞最中なのだ、その證據には彼等は齊しく右足か左足を舷からつき出してゐるのだが、その足の拇指に必ず糸が結ばれてゐる。日本人が手で釣つてゐるところを彼等は足で釣つてゐる。まことに無精な釣りである。

彼等は三十分一回ぐらゐづつ、やをら頭をあげて糸を操る。その仕掛はハへ繩に似てゐる長さ二、三百尺もある細い麻糸を出しその先に二寸もある大きな鈎をつけてゐる。餌は川蝦か、みみず、或は肉の小切れをつける。糸の末端には握りこぶし程もある錘がついてゐて、川底に落ち速い流れに糸を張つてゐるといふ寸法だ。五、六十もある鈎に餌をつけ終ると錘を川の中に放りこんでその端を足の拇指に結びとまた知らぬ顔の半兵衛でごろりと横になる。これでいい時機にぶつかると、文



字通り鈴なりに喰ふのだから愉快だ。

釣れる魚もまた種々雑多で雷魚に似たガヤーといふのや鯰の一種のガクーといふのが底の方で喰ひ、内地でいへば鯰といふ恰好のガヂーンが川の面に近い鈎にかかると、面白いのはこのガヂーンといふ奴は丁度出目金のやうに目が飛び出してゐる。いづれも五、六寸で、大きいになると二尺、三尺といふのが時たまかかる。さすがこの大ものが喰ふと漁夫はあわてて跳ね起き真剣になつて糸を延したり、操つたりしていなすのだ。

ラングーンには釣道具専門の店が一軒もなく、露店で時たま日本製の釣り鈎をみかけるが、ビルマ人は釣りを樂むといふことをあまりしないらしい。僅かに水邊に近い連中が副食物をとるために漁夫とは違つた仕掛で陸釣をやつてゐる。

ラングーン河や市に近い、ヴィクトリヤ湖、ローヤル湖畔で長さ二、三間の竿で浮釣りをしてゐるのを稀に見るが、竿から、浮子から全部手製で、勿論ラグスなん



南方の釣師たちの姿・ビクにも一くせある

か使はず、太い秋田糸みたいな、道糸に大きな一本の鈎をつけ、大ものばかり狙つてゐるやうだ。

釣れる魚は鯛みたいで、これも出目金の鯰と同じく、ガヂーンといつてゐる。

サルウイン河の釣りは四、五十尋もある麻糸に大人の指を曲げたやうな大きな鈎で、餌には鶏の腸を、一羽ぶん全部をつけ、錘も何も使はず、川の中に投げこんで置く恐しく鷹揚な、南らしい釣り風景だつた。



## 釣り奇譚

— 鱧と一騎討ち、泣く人魚 —

海國男子の心意氣を一杯に膨らませて、金波、銀波をかき分けつつ腕と度胸に物をいはせて斷然日本人ならではの獨壇場を築き上げてゐたのは南洋における邦人漁業だ。支那人もマレー人も日本の漁夫には、足許にも及ばなかつた。そしてこの海で敢闘する漁夫たちにも二十年、三十年の間には、盡さぬ話題を生み、いろいろの奇譚も生れるのである。ここには肩のこらない南洋漁業奇譚の二つ、三つを紹介しよう。

糸に五寸釘をぶら下げて海中に放り込んで置いたら、翌朝には大きな鱧がかかつ

てゐたとか、魚も土着の人間と同じやうに椰子の木蔭で晝寝するとか、あるひは非常にきらきらと眩しく光る海面に魚までが、南洋呆けしてぼつかり浮いてゐるとか他愛もないお伽噺は澤山あるが、結局それは晝寝のたはごと以上のものではない。

なるほど、海上直射と年中氣候が同じなため水中温度も大した變化はなく、貿易風の影響を受けて内地の魚のやうに、世智辛くはないが、想像されるやうなぼんくらでもない。

静かな海、嵐のない海、漁業には全く好條件揃ひともいへるが、『板子一枚下は地獄』の漁師稼業ともなれば、またいふにいへない苦勞があるものだ。その中でもまづ鱧の恐しさを書かねばならない。

鱧は南方の名物だが、この暴君のためどれだけ惱まされて來たか、水の中で作業する漁師にはスコールよりも龍卷よりも恐しい鬼門なのだ。それだけにいつも生命の危険がつきまとつてゐる。何時やられるか判らない。ある時などは油と汗で汚れ



きつた作業服を洗濯するのも面倒臭いと、縄で結へて船の行くままに一晩水中に流しておいたところ、翌朝見ると、なんにもなくなつてゐる。作業衣に染み込んだ人間の體臭につられて御馳走さまとばかり饜が頂戴してしまつたわけだ。

饜はまた恐しく食辛棒だ。數年前ビンタン島附近で大饜が獲れた。長さ三間、腹がでつぶりと膨れてゐる。早速メスを入れて見ると、何と驚いたことには、骸骨が一つ、猿の頭が二つ、尻尾が二つ、ばらばらになつた雨傘の骨などが出て來た。

饜はよく船のあとを追ひかける。饜にいはせれば、

『船についてゐれば、食ひはぐれはないよ。』

と、嘯くに違ひないが、船から捨てた残飯や汚物を食ひに來るのだ。日露戦争の時バルチック艦隊が、大西洋、インド洋、太平洋、支那海の饜をみんなお伴に連れて日本海に乗り込み、そのため一度に日本近海に饜が増えて、蒲鉾の値段が一時下つたといふふざけた話が傳へられてゐるが、今度の大東亞戦争では、わが無敵海軍の

艦艇について、日本近海の饜群が遠くマダガスカル、シドニー、アリュウシャン等へ乗り出し、撃滅された敵艦に武者ぶりついて御馳走に舌鼓を打つてゐると思ふ。

昭和四、五年ごろには饜のため、年一人や二人の犠牲者が必ず出たものだつたが慣れるに従つてこの災厄も少くなり、漁師の方でも細心の注意を拂ふやうになつた『饜！』と船上で誰かが叫ぶと、電撃的にばつと船に飛び上つてしまふ。しかし深くもぐつてゐるとか、船に取つて暇なしに襲はれた場合などは、正に食ふか食はれるかの生命を賭けた激闘が行はれる。

饜は獲物を見つければ、快速艇のやうに波を切つて突進して來るが、近づくと用心深く獲物の廻りをぐるぐると廻つて、先づ隙を狙ふ。隙を見出すと敢然猛烈なスピードで飛び込んで來る。その時、大きな圖體をさつと反轉させ、その勢ひでがぶりと噛りつく鋭い齒、巨大な身體、その上に眼にも止まらぬ早業でぶつかつてくるので、人間が不自由な水の中で取組んで見たところで、所詮戦車に蹂躪されたやう



なものだ。

だが、こんな時、日本人は不屈の魂を發揮する。後方から襲はれば、施す術がないので、正眼に構へて、あの氣合もろ共、正面から向つて行く。そのうち鱧の上顎が銛のやうに飛んで来る。このままぶつつかつたらおしまひだ。瞬間さつと身を躲す。そしてぐつと顎にとりつく。しつかり胸に抱へて口があかないやうに締めつける。鱧はこの期に及んで死物狂ひで暴れる。だが手を寸時も緩めることは出来ない。振り落されでもしたらそれつきりだ。がつちりと取組んだまま、沖繩得意の手法で鱧の目玉へ二本指をぶち込む。流石の暴君もこれには參つて文字通り盲目滅法で逃げ出してしまふといつた寸法である。このやうに都合よく行けば上々だが、行かない場合も勿論多いさうである。

漁師は海龜には目がない、籠甲細工その他なんでも利用され、價格も高いので、航海中この海龜でも見つけようものなら、止めるのも聞かずに、大海原に飛び込ん

でしまふ。龜君は音に驚いて、ぐんぐん深みへ潜る。漁師はどこまでも追かけて行く。そして龜に近寄ると、實に心得たもので、赤ちゃんのお守りのやうに龜君のお尻を指先でくすぐる。どうにも堪まらない龜君は、足をばたばたさせてゐるうちに浮力がつき、お誂へ向きに水面まで浮び上るわけだが、たとひ禰一本の身軽さといへ、十五尋も潜れば流石の漁師たちも、息の切れるものが、かなりゐる。さうなると大變だ。次ぎから次ぎへと飛び込み、一人が手を持ち足を持ち人梯子をつくつて引つ張り上げる。早速船上で人工吸呼をやると大抵皆息を吹きかへすのである。變り種の人魚も南が名産地である。最も多いのはアンダマン諸島から濠洲東海岸にかけての海岸、今度の大東亞戦争の大戦果によつてわが國は人魚まで獨占することになつたわけだ。身長三尺から八尺ぐらゐ、上半身は非常に滑らかで、イルカとオットセイの混血兒のやうな感じがする。

ぼつかり海面に頭を出した子供にお乳を含ませてゐる姿は、遠くから見ると、全



く人間の女と間違へるほどよく似てをり、母性愛が強いので、幼児をとられると、母親も悲しんで随いて来る。陸に揚げる不運を嘆いてか、さめざめと涙を流すのだ。その泣き聲がまた優しく、人間の聲に似てゐるといふ。マレー人や支那人はこの人魚の肉を非常に珍重なものとして腹を断ち割るが、邦人漁夫たちは流石に人情脆く、到底庖丁を揮ふ氣にはなれず何時も海藻などを與へて逃がしてやるさうだ。漁法は流し網、追込み網、曳き網、一本釣り等で。どこでも大差ないが、支那人マレー人が使ふ珍しい常置網を御紹介しやう。老練な漁師が、海面をじつと睨んで『ここだ』といふところに柵を立てる。すると腕つ利きの若者がもぐり込んで決められた区域の中で、海底の土を次から次へと掘んで食べる。硅藻の種類によつて土が甘かつたり。辛かつたりする。土の味覺によつて、ここがいい漁場になるか決めるのだ。かうしていい漁場を見出した漁夫たちは、潮流その他の關係を考慮に入れて、ここに網を張る、全く原始的だが永年の經驗で殆んど間違ひはないのだ。





ライス・ターフェル

—山の幸、海の幸十幾種—

『うわあー、もう澤山だ。』

『いや、俺は平げるぞ。』

ずらりと御馳走のお皿を抱へて並んだ二十名のジョンゴス（給仕夫）のまだ半分も濟まないうちに、一人が音をあげると、食慾旺盛な一人が、残つたジョンゴスの頭数を眺め廻はして舌なめすりだ。見ると、もう卓子の上の大皿には、白飯を中心に十幾種のジャワ料理が山をなしてゐる。これが有名なジャワ料理の豪華版『ライス・ターフェル』だ。

物の豊かなジャワに相應はしいこの料理の量の多さには、千軍萬馬のわが勇士も食ひ切れずに、悲鳴をあげる者もゐるといふのだから、大抵の想像はつきませう。

『米食の卓子』といふこのライス・ターフェルは、今でこそジャワの名物になり、大きな観光ホテルなどでは、どこでも出して立派な御馳走になつてゐるが、もとはといへば、ジャワ人主食の米に出来るだけ多くの副食物を添へたナシ・ブッサール（結婚式などに出す飯）を和蘭人が自分の口に合ふやうに、作り上げたものである。

大東亞戦争前までは、バタビヤのホテル・デス・インデスとか、バンドンのホテル・ホーマンなどの一流の食堂へは始終この東洋味豊かな豪華味食へ家族連れで出かける和蘭人の姿が見られたといふ。

いま假りに、わが南征の勇士達が、一つの卓子を圍んで、このライス・ターフェルを命じたとすると、まづ徐ろに大皿が卓子上に配られてから、待つこと暫し、やがて白い詰襟のジョンゴスが一人、白飯の皿を持つて出て來ると思ふと、直ぐその



後から後から各々の御馳走を盛つた皿を平均二つぐらゐづつ抱へてその後につづき卓子に向つて、すらりと一列の御馳走の行列が出来る。多い時はこれが二十五人位になるのだから正に盛んなものである。

この先頭の飯盛は、マンドウル（給仕頭）で、これが先づ白飯を皿の上に配るとその後から次ぎ次ぎと全部の御馳走が、或ひはその同じ皿の中へ、或ひは別の小皿の上へ配られるわけで、一皿に氣を奪はれてゐると、最後の御馳走が来るまでに、皿は山海の珍味に満たされて、つひには悲鳴を擧げるといふ次第なのである。

この食事には、殿しい食事法があるといふが、御馳走の順序は、白飯の次が野菜のカレー料理といふだけで、後は別に決りがないさうである。

バナナのフライ△リソール（挽肉を揚げたもの）△馬鈴薯とカレーと鶏肉を混ぜて煮たもの△鶏や鴨のフライ△コロッケ△肉饅頭△ソーセージ△ハム△卵フライ△肝臓料理△細長く切つたパン△サツテアヤム（鶏肉の串焼）△サツテカンビン（山

羊の串焼）△サツテベベ（家鴨の串焼）△洋葱△ケーキ△ズウレス（小さい漬物）△チャットエ（混成香味品）△ビーナツ△クルボック（米粉をエビで味をつけた煎餅）と、一寸敷へただけでも二十種を超えるが、更に乾魚料理や、すり碎いた椰子の買などの南獨得の味覺には、勇士達も頬を崩して大満悦の態である。

南方料理の王座は、正にこの邊ではなからうか。



## 燕の巢

——二階住居の樂天地——

グリセは燕の街である。ジャワ島スラバヤ市の北部十八キロ、明るい海沿ひの町で、昔から支那料理に珍重される燕の巢の世界的産地である。この珍品もやがては日本へも、どんどん送り出されるであらうが、一足先に『燕の街』を訪ねて祖國の皆様の嬉しい食卓へ、おいしい贈物としよう。

スラバヤから自動車を飛ばして、坦々たる舗装道路を行くと、二十分でグリセの町に着く。途中の沿道に鹽田のやうな、養魚池が無數にあつて、バンドユニといふ鰻に似た魚がとれ、極めて營養價が高い。

グリセの町は回教文化の中心地であつたといはれるが、町の所々に古びた寺院の跡があるのみで、今では燕と魚の街となつてゐる。人口八萬、支那人と原住民ばかりで、和蘭人の少かつた町である。

曉と黄昏ごろになると、この町の上空は、灰色の燕の大群が飛んで、曇天のやうな光景を呈するのである。すいすい飛び交ふ燕の輕快な大空の亂舞を讚へる暇もななまでに燕に壓倒されてしまふ有様である。戦前はこの町から輸出された燕の巢が昭南市を中心に、香港、上海を経て支那各地に珍重されたものだが、いまは専らジャワ島内で消費され、警備の兵隊さん達も珍味に舌鼓を打つてゐる。

燕の巢は支那料理のスープに用ひられるが、香りと味がよく、その上營養價も高く、飼育も面倒臭くないところから、この燕養育は頼れを知らない。そして『燕の家』を持つてゐる人は、大金持ちになり、別莊を建てたり、數名の妻を持つたりしてゐるのが多いといふ寶の島らしい話だ。



ジャワ島内で燕の多いのはグリセを筆頭に、シロクジャ海岸とチエプー、プローラ附近であるが、グリセの燕巢がすば抜けて好評を博してゐるのである。この燕たちは、立派な建物の中に住んでゐて野宿のものはない、燕の天國なのだ。支那人アラブ人、ジャワ人によつて經營された『燕の家』は十軒もあり、八千羽の燕が、グリセを故郷に飛び廻つてゐる。一階は主人家族の住居となり、二階が燕たちの嬉しい埒である。

燕たちは早起きで、毎朝五時には目を覺して飛び立ち、海上に出て餌を探し廻り夕方六時ごろには隣組をつくつて歸つてくる。彼女たちはジャワ島を横断して、インド洋上に現はれ、無人島に降りたり、浪の花散る珊瑚礁に翼を休め、時には遠く濠洲近くまで飛翔することもあるといふ。かうして『インド洋の散歩を終へた燕たちは海中の小動物を食べたり、海草を嘴に含んで持ち歸り、せつせと巢を營み、卵を生む。可愛い燕が生れ、やがてその子も三ヶ月ぐらゐ経て洋上に活動を開始する

のである。『生めよ殖やせよ』と子實燕たちも忙しいのだ。

巢は、海草と唾液で作られるが、うす暗い二階の天井や壁にはこの巢が無數にある。二階を燕に間貸ししてさへあげば、主人達は一階で遊び暮らしてゐても、いつの間にか大金持になつてしまふといふ嘘のやうな話である。餌一つやらず、ただ巢の出来るのを待つてゐればよいのだ。

戦前は燕の巢一キロ八十圓の値段で、一戸當り年産四千圓も収入があつたといふから、南の燕たちは、偉大な勤勞部隊である。それに燕の仇敵鷺が今度の戦争で追放されたのか、最近は被害もなくなり、燕たちは日章旗はためく南海の島々を嬉々として飛び廻りながら、平和な活動をつづけてゐる。燕の世界もまた『ニッポン・パンザイ』である。



# タビオカ

—『おさつ』そつくり南の代用食—

代用食タビオカといつても、内地の皆さんは御存知ないでせう。これは恰度、馬鈴薯の味とそつくりで、形はお化け甘藷といつた恰好です。耕作は、至極簡単でタビオカの莖を一寸位切つて、土に植えると、忽ち數本の小枝が生えて來ますが、そのうち二本を残して、全部切りとり、六ヶ月も立つと六尺位に伸びて、もう根には立派なタビオカが鈴生りになつてゐます。大きいのは一尺もあり、これを茹で、砂糖をつけて食べてもよし、バターでいためたら、非常においしいものです。

お腹にも餘りもたれず、滋養も豊富で、耕作が至つて簡単であり、値段が至極安



タビオカの畑を手入れする住民・圓内は手にしたタビオカ



いと来てゐるから、これほどよい代用食はなくインドネシア人にとつては、なくてはならないもので彼等はこれを細かく刻んで乾燥させ常食とします。

一本の根についた五、六個のタビオカが、一錢から二錢だといふから驚きます。戦後のマレーは宅地を利用して、住民にこのタビオカを植えることを奨励してゐますが、ジャワではどこの農家へ行つてもこのタビオカが作られてゐます。

## ゲテモノ食

——さそり、蛇、鱒、龜料理——

變化の少ない奥ビルマ警備の苦勞の中で何かの楽しみを發見しようではないかと最近兵隊さんが、考へ出したのが、下手物を食べることだ。それが、また實にうまい、南の味食に一枚加へて貰へます。

ラングーンから、北へ登つたトングーの街で、ある日烏とさそりが路上で互に譲らず、睨み合つてゐるので、よく見ると、さそりも例の猛毒のある尾を、ぐつともたげて、今にも烏をひと突きにしようとするれば、烏も流石に、さそりを食ひかねてたちたちとしてゐるので、兵隊さんは、早速部隊へ歸つてその話をする。



『それなら支那事變以來お馴染のあのさそりの尾を食べようぢやないか。』

と一決、早速さそり狩りをやつて苦心の結果、十八匹を捕へ、その夜焼いて醬油をつけて食べたところ、なんと香ばしくぼりぼりしてこんなおいしいものが、又とあらうかと前線の話題は次から次へと、最近はさそり焼き料理は大評判となつてゐる。

蛇を煮ると、これはおいしいと、御経験のあるお方も、内地にあることでせうがビルマの蛇は内地の蛇のやうに、生優しいものばかりではない。六、七尺もあらうと思はれるでかいのが、さらにゐるので、兵隊さん達は、なんとかこれを料理しようといふことになり。最近では時折り『蛇飯』を作つて食つてゐるが、内地で一寸味へぬ乙な飯で兵隊さん達は内地に歸つたら、

『蛇飯屋でも開業するかな』

と洒落を飛ばして、ぱくついてゐる。

これは南方ならではの『鰐料理』しかも南方でも一寸簡單には、食べられないと

ところに鰐料理の値打ちがある。鰐は牛肉より一寸肉が硬いが、齒の訓練になつて大いによろしい。南へ來ると、兎角齒槽膿漏になり易いが、鰐の肉を切り取つて、焼いて何時までもよく噛んでゐると、齒の衛生上非常によいと、兵隊さん達は、この頃ジャングル地帯を通る度に、『鰐は居らぬか、鰐はどこぢや』と呼んでゐる。

ビルマには三、四尺もあるやうな海龜が澤山ゐる、スッポンも少くない。ダイヤモンド島といつて、龜が無數に集る名所もあるが、この大龜の甲羅をそのまま、鍋にして食ふ龜料理の珍味は、また格別だといふことだ。それから龜の卵が精力劑として、喜ばれるが、これは精分が強く、少し食べ過ぎると、忽ちおできが出来るさうだ。

ビルマまで來ると内地の匂ひのするものは、なんでも大歓迎だが、ビルマ要人のお茶の會に招待された兵隊さん達が、食卓の上を見るとなんと黒羊羹そつくりの菓子が、皿一杯盛つてあるではないか。ビルマで羊羹が食べられるとは、と大喜びで



一口頬張ると、それは又、臭氣紛々、忽ち吐き出してしまつた。ところが、これは  
 ビルマ人の間では、高級菓子で果實の王といはれるドリアン實を醗酵させて練つた  
 ものであつた。ドリアンそのものが、食べ馴れるまでは臭くて鼻もちならぬのに、  
 それを醗酵させてあるのだから、たまつたものではない。

ビルマではどこでも、豚の頭を吊して賣つてゐる。頭をどうするのかと聞いて見  
 ると、兵隊さん曰く、がふるつてゐる。

『戦線では食べられぬものは殆んどありませんな、豚の頭を燻製にして食べる位  
 のことは朝飯前で、鶏につて頭やトサカまで、綺麗に食べますよ。しこしことし  
 て、こんな旨いものはありません。家鴨だつて結構、頭も眼玉も綺麗に食べられ  
 ます。大體肉だけ食べようなんて贅澤ですよ。』  
 と、流石、無敵皇軍だけあつて、向ふ所食通の方も敵なしといつた形、銃後の皆様  
 なんと如何ですか。



昭和十八年一月十日初版印刷  
 昭和十八年一月十五日初版發行

〔五、〇〇〇部〕 南の傳説  
 定價 壹圓五拾錢  
 東京日日新聞社社會部

編者 松浦良松  
 發行者 東京市麴町區内幸町三丁目二番地 野田淺雄  
 印刷者 東京市神田區佐久間町三丁目二番地 河野仰一  
 印刷所 東京市東區(四ノ)信行社印刷所

發行所 東京 郁文社  
 東京市麴町區内幸町三丁目二番地  
 振替口座東京七六四五  
 會員番號一二〇一一二三番  
 出文協承認ア三四〇一八一

元給配  
 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九

16-4-  
 16



前外務大臣 松岡洋右閣下 題字  
外務省前南洋局長 齋藤音次 序

中田千畝 著

# 黒潮に つながる 日本と南洋

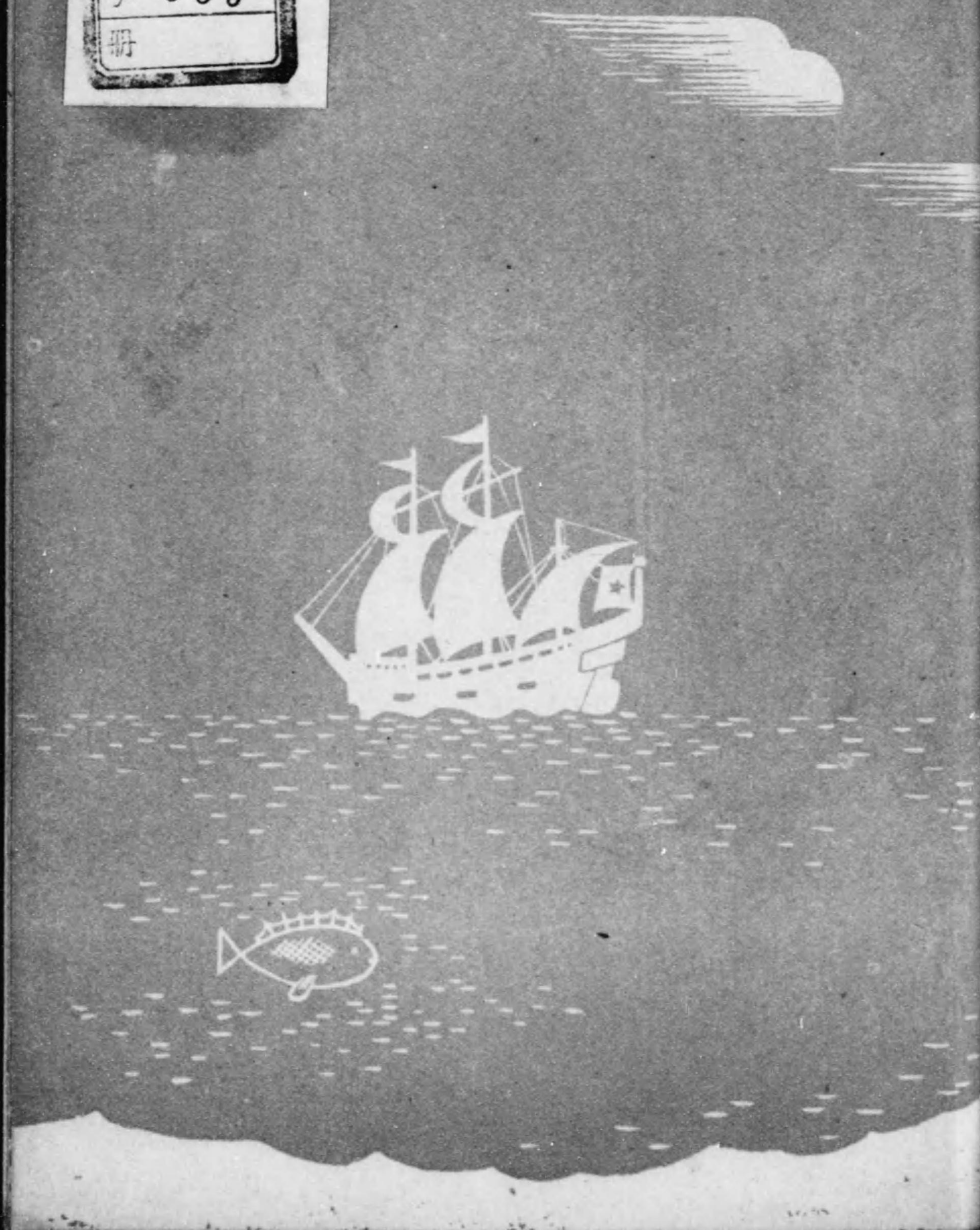
B6判 四一四頁  
美装 上製  
定價 二・八〇  
〇・二〇

大東亞の民族學的究明は今後東亞の盟主日本に課せられた重大なる問題である。本書は大東亞共榮圈確立の原理を日本及び南洋の神話傳説の對比論考によつて抽出せんと試みたもので讀者は、彼我兩民族の有つ神話傳説が、その因子、構成、内容等に於て實によく近似して居るのに、先づ一驚を喫さるることであらう。世界に比類なき日本文化の據つて來たる源泉を探り、その發達の過程を究明することは、日本民族精神の眞髓を把握する上において將又皇國永遠の興隆に寄與せんとするものの忽諸に出來ぬ問題である。本書は我等日本民族がこの皇土に偉大なる文化を建設するまでの移動の跡を明かにし、我國の神話傳説と周圍民族のそれと對比論考することによつて、この課題に應へんとするものであり、大平洋永遠の平和を祈念し、大東亞共榮圈確立を祈求するものは是非とも一讀すべき好著である。

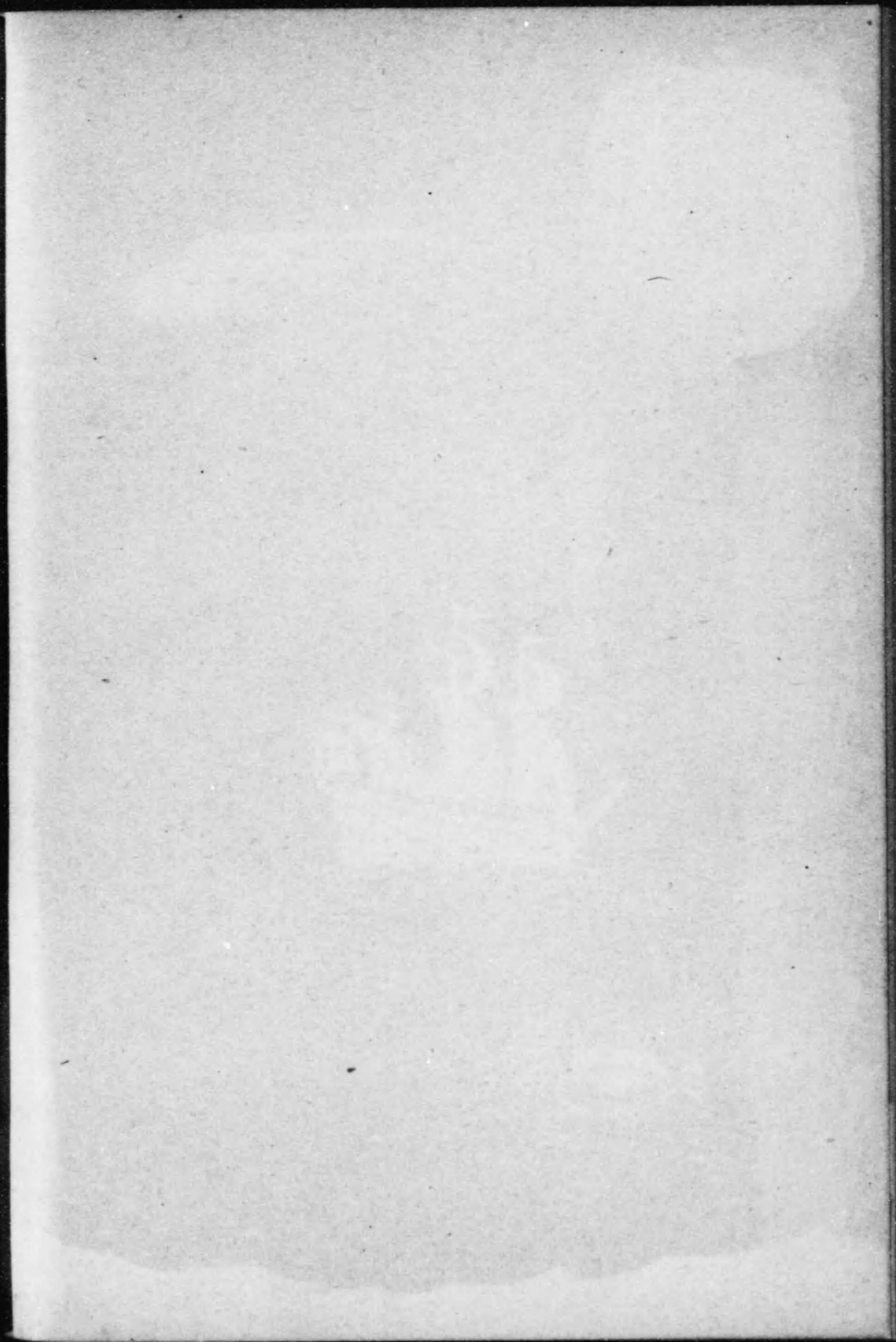
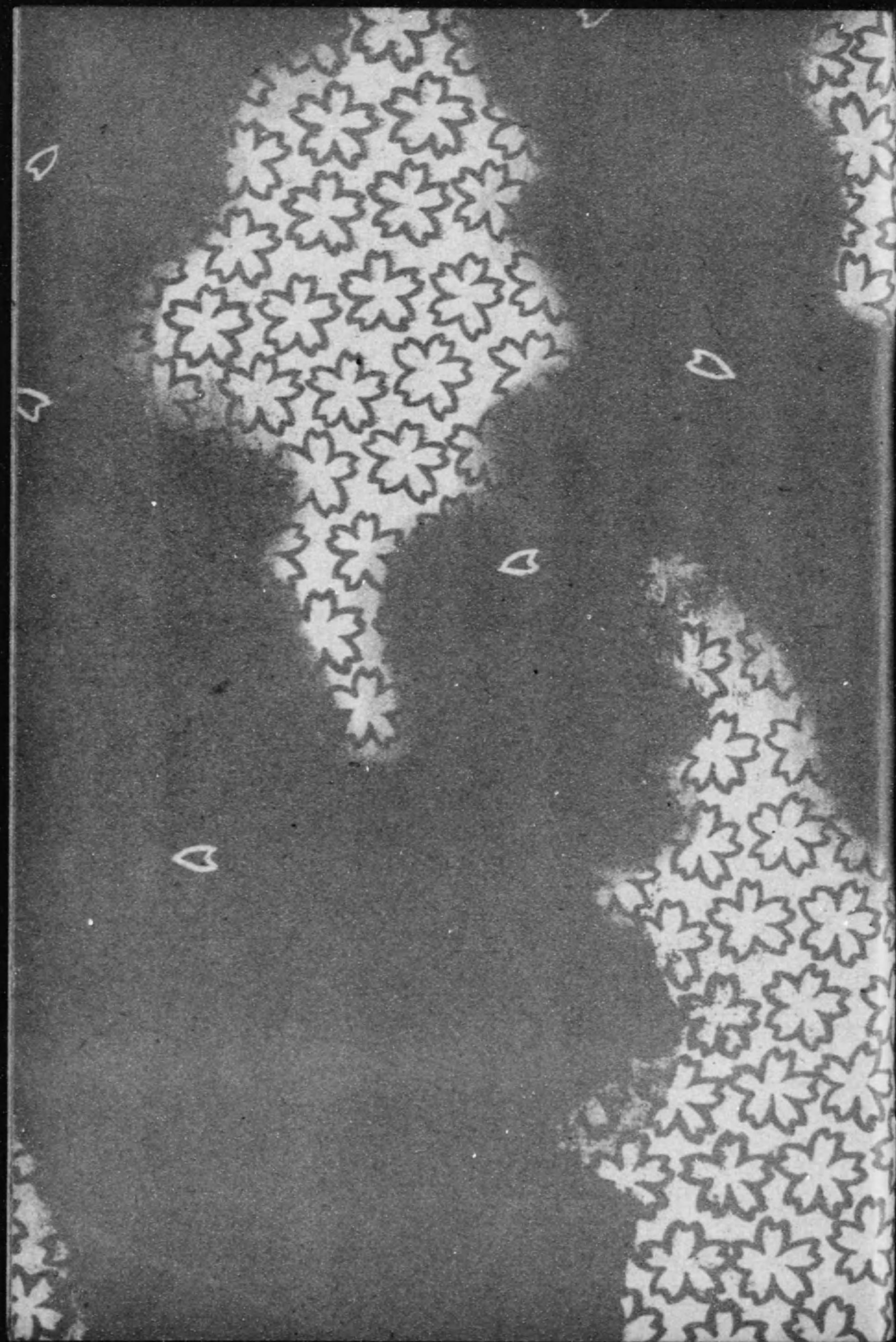
東京 郁文社 刊



本院議  
函  
号 388  
册











388



京 郁文社 發行

¥1.50



